

# 建長五年四月二十八日は 宗旨建立にあらず(二)

廣田頼道

はじめに

先回の芝川17号の中で私は「建長五年四月二十八日は宗旨建立にあらず」という論文を載せた。そのきっかけは、花野充道師から送って頂いた「道心」17号の中で、榎木境道師が、

宗旨建立会法話

「自行化他の題目」（道心17号か芝川17号参照）という一文を載せ、その中で「宗旨建立」という理解と表現に明らかに混乱を来している内容の為に、その論文を芝川17号に破折対象として示したのであります。

しかし、私の論文に対して現在まで榎木境道師からの反論はありませんでした。

自分の主張を批判され、法門に関わることで無言無視の姿勢をとるといふことがどういふことか。

「道心」に載せた文章にどういふ責任をとるのか、深く考えて貰いたいと思うのであります。

### 大石寺正信会の姿勢

榎木境道師を庇つて言わしてもらえば、この世の中で榎木境道師だけが声高に「宗旨建立」と言っているのではなく、大石寺貫首自身が「宗旨建立七百五十年」と、正しく声高に四月二十八日には完成していなければならぬものが、建築許可申請出し忘れから十月にズレこんだ奉安堂建立と、登山会成功と、折伏ノルマ、抱き合せで「宗旨建立」「宗旨建立」と大合唱なのであります。片や正信会においても、「宗旨建立」という発言が継命新聞や地方誌の中で個々の考え方から不統一で出てくる。

「宗旨建立」「立教開宗」では意味するものが違うにもかかわらず、「宗旨建立」と言つた方が重々しく重大な感覚がするので、あまり深く考えることもなく適当に言っているのだらうと思う。私が批判したきっかけは榎木境道師の論文だが、大石寺貫首が「宗旨建立」のシユプレヒコールをしているならば、こういう理由で「宗旨建立」こそが正しいと破

折の論文を出してもおかしくないのではないかと思う。何故、同じ「宗旨建立」を唱える同門の僧侶を庇つてあげないのだろうか。貫主も貫主以外の人間も「道心」の仲間も、何をしているのだろうか。

正信会の人々も本当に「宗旨」が四月二十八日にあるかどうか良く考えて発言しなければいけないと思う。しかし、この「宗旨」「宗教」の表現の混乱は、現在にはじまったことではないのであります。

昔の書物を読んでも

「立宗宣言」

「立教開宗」

「宗旨建立」

「立宗会」（宗制宗規の文章）

「建宗会」

本宗年中行事	
一月一日	元朝勤行
二月七日	興師會
今十六日	宗祖誕生會
春彼岸中	春季彼岸會
四月一日	御綿下
今廿八日	建宗會
六月一日	御襟巻下
全日	御團扇上
	御難會
	秋彼岸中
	秋季彼岸會
	御綿上
	宗祖御大會
	日師會
	三祖報恩講
	此外總本山於テ八月七日靈室
	虫拂大法會五月日大行會八月

(この図は四十年余り前、過去帳の最後頁に印刷されていたものであります)

昭和二十七年、御書全集の序文として示した堀日亨上人の言葉は、

聖祖建宗七百年

と表現されています。

これ以外にも呼称があるかもしれませんが、まったく不統一に表現されて来ているのであります。

つまり、日蓮正宗はいつの頃からかは分りませんが、一切衆生成仏の法を唯一説く所の日蓮大聖人様の宗旨がいつ立てられ、どこに頭わされたのかも見失い、分らない人々の集りになり果ててしまっているのではないかと思っております。

「宗旨」が何か「宗旨」がどこにあるのかも分らないで成仏を願ひ、折伏し、広宣流布を求めることが、いかに無謀なことか、この際、良く考えなければいけないと思っております。

日蓮正宗の僧侶は、正面から議論しなければいけないことを無視したり、群れて意見を述べる者を蔑んだりして時間の流れの中で有耶無耶にする政治家

や官僚に共通したものがあつた。しかしそれは無視でも蔑みでもなく、自分に純真に研鑽し正邪を識別しようとする信仰がないだけなのであります。そんなことよりも、もっと大事なことがあると批判する人間もいるが、Aの人が大事と考えることとBの人が大事と考えることを比べて順番をつけることなど出来ないことなのであります。

榎木境道師も、大石寺の貫主はじめたくさんの人々、又正信会の人々で異論を唱える人も、論文に整理して反論する人がいかなかった。でも「宗旨建立」の発言は平気でされている。ならばその発言の根底に正当な論拠があるのか……。

こんな人々の中で、先回の私の論文に対して二名の芝川読者の御信者さんが破折の手紙を送つてくれた。

御住職に、少々御聞きたく思います。

毎日毎日、私はどうしても納得しかねております。

諫曉八幡抄 五八五P 一行目

今日蓮は去ぬる建長五年四月二十八日より

清澄寺大衆中 八九四P 四行目

建長五年四月二十八日安房の国東條の郷清澄寺道善の房持佛堂の南面にして淨圓房と申す者並びに少少の大衆にこれを申しはじめて

聖人御難事 一一八九P 二行目

此の郡の内清澄寺と申す寺の諸佛坊の持佛堂の南面にして午の時に此の法門申しはじめて今に二十七年、弘安二年なり、佛は四十餘年、天台大師は三十餘年、伝教大師は二十餘年に出世の本懷を遂げ給う……余は二十七年なり

大聖人様は、はつきりと立訳ておられるのに、どうして出世の本懷と、イコールに成るのでしうか。

佛法の法軌を違える事はルール違反になるのではないでしうか。

四菩薩造立抄 九八九P 九行目

私ならざる法門を僻案せん人は偏に天魔波旬の其の身に入り替りて人をして自身ともに無間大城に墮つべきにて候つたなしつたなし。

明確な解答は御書の何処に有るのでしうか。教えて戴きたく存じます。

個人名は論の筋道と違ふことなので内容だけをご

こにそのまま載せませす。二人ともほぼ同じ内容です  
ので一つだけに留めさせて頂きます。

私は嬉しかった。大石寺の貫主はじめ、多くの坊  
さんさえも勇氣なく出来ないことを示してくれた。  
そしてこの手紙を頂いてなんとしても、一步深めて  
整理してこのことを再度示さなくてはいけないと考  
え、今回筆を執るきっかけとなつたのであります。

### 宗教と宗旨の違い

中村 元 著

仏教語大辞典 645P

【宗教】①それぞれの思想的見解（宗）を説く教え。  
系統。部門。②言語では表示されない究極の真理と、  
それを人に伝えるための教え。宗と教え。③自己が  
奉ずる教え。宗旨。④教宗ともいう。

【宗旨】①根本の趣意。②禅宗では仏法のおおもと。  
如来禅の生粋のところ。根本思想。または修行のよ  
りどころ。③一つの宗派の教理や宗義の要旨。主旨  
とする教え。④俗に一つの宗派をいう。

インド仏教の最高権威と評される中村元氏にして  
も、別々の項目を挙げ乍、「宗教」も「宗旨」も同

じ様な表現を並べているが、かろうじて「宗教」の①にあげられる、それぞれの思想的見解を説く教え。系統。部門。「宗旨」の①根本の趣意。③一つの宗派の教理や宗義の要旨。主旨とする教え。に、「宗教」と「宗旨」の相違点が見出せる。

辞典という言葉の数の限られたスペースの制約もあるのだろうが中村さんの記述よりも、私は、昔からの日本人の表現感覚の方が、たしかだと思える。

昔しから日本人は、相手の人の宗教を尋ねる時に「御宅の宗旨は？」と聞いた。

つまり、仏教伝来より今日迄、真言宗、浄土宗、

禅宗、日蓮宗と、種々の宗教があるけれども、たとえば念仏宗には大別して浄土宗（法然）、浄土真宗（親鸞）、時宗（一遍）と分派しています。門外漢から見れば念仏宗という宗教はどれもいっしょに見えますが、それぞれの宗派（宗旨）の人にとっては、絶対に組み出すことが出来ないが故に分裂（分派）したのであり、他派は他宗と同じだということになり、教えの解釈も価値観も目的観も違う。だから日本人はそういういきさつを考慮し、尊重して

「あなたの宗旨は何ですか？」と尋ねるのであります。

南無阿弥陀仏と念仏を唱えているからといって同じだと思われたくない。自分達の宗旨（心）はこういうものなんだというのが教化折伏する核とエネルギーとなるのであります。

つまり宗教は阿弥陀如来を本尊として、依経論は

「無量義経」「阿弥陀経」

「観無量寿経」「浄土論」

という山の裾野は宗教。

山の頂上は宗旨。宗教が

詮じ詰められて行ったエ

キスが宗旨、宗教に支え

られ宗教と離れてはなり

たたないけれども、宗教

が同じだからと言って宗

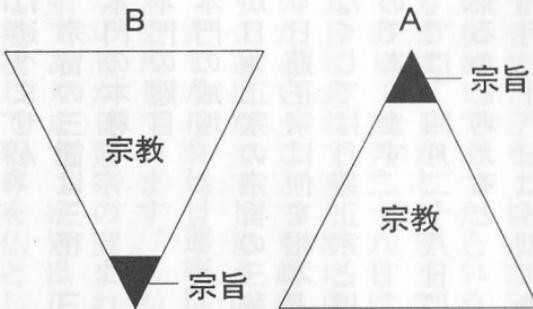
旨がいっしょだということ

にはならないという関

係が宗旨と宗教の関係で

あり相異点なのでありま

す。



次に、では宗教が詮じ詰められ弁証的に宗旨が導き出されるという単純なものではなく、従因至果（本果妙）と従果向因（本因妙）の関係の様に、宗教の上に宗旨が乗っているのではなく、宗旨を根本として宗教があるのとらえるのであります。

宗旨と宗教は離れることの出来ない関係であり乍頂上と裾野、過程と目的ほど違うものなのであり、宗旨がなくてはその信仰の核はないということになるのであります。つまり華が「宗教」ならば種が「宗旨」というA図からB図へ発想の転換がなされ、宗旨が柱となつて宗教に貫かれていてこそ信仰が成立することになるのであります。

### 宗教の五綱と宗旨の三箇

日蓮正宗の教義体系の中で、仏法を弘めるにあつて必ず心得なければならぬ基本的規範として、教機、時、国、教法流布の先後の五つをあげます。

これを宗教の五綱と言ひ

教機時国抄（全438） 曾谷入道等許御書（全1026）

等に意味する概念が示されています。つまり宗教は山裾の基本的規範ということなのであります。五綱

の意味は、個々調べて貰えば分りますので、ここでは述べません。

宗旨の三箇は三秘、三大秘法といわれます。

本門の本尊

本門の題目

本門の戒壇

が日蓮正宗の宗旨の三秘というのであります。つまり日蓮正宗は何を根本として存在するのか？ これなくしては日蓮正宗とは言えないというのが宗旨なのであります。

では、四月二十八日に「宗旨」を見出すことが出来るかと考えると。

四月二十八日は佐前であり。

四月二十八日には文上はあつても文底はない。

四月二十八日には法華経身読（法難等）がない。

四月二十八日には宗旨の三箇はない。受持の師弟一箇すべき弟子、信者もない。

四月二十八日には真言宗、天台宗批判がない。

のであります。つまり「宗旨」はないのであります。

出世の本懐と宗旨が何故イコールかとの質問の手

紙がありました。

日蓮大聖人様は

「余は二十七年なり」（聖人御難事 118P）

と出世の本懐（一大事因縁）を示されている。つまり出世の本懐として熱原法難を機縁として一切衆生成仏の確証を得、宗旨の三秘である本門の本尊を顕わしたのであります。だから出世の本懐（一大事因縁）イコール宗旨とは当然のことなのであります。

出世の本懐（詮じ詰められた法）が宗旨でなかったならば、日蓮大聖人の法華経身読の生涯は何んの為に必要なだったのか分らなくなってしまうのであります。

日蓮大聖人様は生れて来る前から仏なのか、生れて来てから仏になったのか。

反論の手紙を頂いた時に、私は、この「宗旨」と「宗教」の混乱と履き違えというのは、実は「宗旨」と「宗教」の解釈、理解のまちがいでなく、その源流は、日蓮大聖人様は生れてくる前から仏であると考えている人々が、この信心をしている中に沢山いて、建長五年四月二十八日に宗旨が建立されたと不

統一に教えられた事を単純に信じ考えているのではないかと思えて来ました。

日蓮大聖人様は久遠元初から仏である。又は、仏が承久四年二月十六日に産れて来た。だから建長五年四月二十八日には、一切衆生成仏の法が全て日蓮大聖人様の御内証には揃っていて、後は衆生を教化する方便として法難の日々を演技し童の口や佐渡や身延の苛酷な生活の中で死と背中合せで正法の為に生きたことも、皆んな元々作られた仏としての方便の振舞いであつたということになってしまふのであります。しかし、そうであるならば宗旨は久遠元初であり、四月二十八日は必要がない。又は、二月十六日に産れて来た時に内証として宗旨を所持されていたということでも教義として成立する信心だということになってしまふのであります。

たしかに身延日蓮宗は四月二十八日を「立教開宗」と表現しています。しかし彼等が言う立教開宗は、この日が日蓮宗の産まれた日だという意味の立教開宗であります。宗旨は正、像、末の末法思想を完全に無視して釈尊を仏として拝するならば、釈尊が法華経を説き始めた時点が何年何月何日かは分りませ

んが、その日が宗旨建立として身延日蓮宗の教義が成り立っているということになります。

日蓮大聖人様が生れる前から仏であり、仏が生れて来た。生れた時から内証として、全ての法を所持遊ばされていた。こうしないと承久四年二月十六日から建長五年四月二十八日迄は仏なのか凡夫なのか整理不能で矛盾することになりますので、なにしろ生れる前から仏であつたという考えが、日蓮正宗の中に根強くあります。

私はこの考え方は日蓮大聖人様の示した法門ではないと思います。

法華經「方便品」に一大事因縁と示し、その内容に開示悟入を具体的に説きます。何んの為に釈尊はこの世の中に生れて来たのか。生れてこなければいけない一大事因縁があつたからだ、十界互具の一切衆生の生命に南無妙法蓮華經の仏の生命が備わっていることを開いて知らしめる為に釈尊はこの世の中にどうしても生れて来らざるを得なかつたんだと説くのであります。

この思ひは、寿量品の結びの經文である  
每自作是念 以我令衆生 得入無上道 速成就佛身

と相通じるものなのであります。

仏がこの世の中に生れて来る理由と目的は一切衆生の成仏の法を示す為であります。ということは、内証では一切衆生との関わりがなく宗旨とは言えない。衆生に具体的に身を持つて手本として示してこそ宗旨なのであります。仏だけの悟り（内証）では出世の本懐（宗旨）ではなく、師弟一箇してこそ宗旨なのであります。

釈尊の教えは、どこまでも仏が主人公であり、衆生に法を教え、導いてやる、救つてやるという構成であります。ですから釈尊は、法華經を説いても法華經の行者ではないのであります。

日蓮大聖人の教えは、衆生が主人公であり、一切衆生が成仏する為の生きた手本を示すのが仏であるという構成なのであります。

故に日蓮大聖人様は生れる前から仏であつたとなれば、本果妙の釈尊の教えと同じとなり、仏と衆生の関係は、各別、差別、上下関係の教えとなり、仏は手の届かない天上人であり、衆生は泥の中で這いつくばる立場で、成仏に手の届かぬ絶望と挫折を衆生に自覚させるだけのものではないのであります。

つまり、末法荒凡夫の一切衆生を救う仏の資格は無く、そこに本因妙の法を見出すことは出来ないのではありません。

日蓮大聖人様自身が  
不輕菩薩は所見の人に於て仏身を見る、悉達太子は人界より仏身を成ず

〔観心本尊抄〕（全集242P）

として、あくまでも一切衆生が凡夫として成仏する手本こそが一切衆生にとつて必要であり、大切であるという考えを堅持されていたのであります。

日蓮大聖人様が、天台大師が「法華玄義」で本因妙の出所として示した法華經寿量品の

「我本行菩薩道」

をそのまま踏襲して

寿量品に云く「是くの如く我成仏してより已来甚大に久遠なり寿命・無量阿僧祇劫・常住にして滅せず諸の善男子・我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命今猶未だ尽きず復上の數に倍せり」等云々 此の經文は仏界所具の九界なり。

〔観心本尊抄〕（全集240P）

と釈尊も人間（菩薩）の時があつたんだと示し乍、

自分だけは釈尊より勝る別格の本仏であるとするならば、これほどの自己矛盾はないということになります。

久遠元初本因妙の本仏は、久遠元初から仏であり凡夫だった時はないという教え。だつたならば、本果妙の法よりも本因妙を口で言い乍、救いのない、一切衆生に成仏の救いの道を示すことの出来ない教えになつてしまふということなのであります。

日蓮大聖人様は

日蓮聖人は御經にとかれてましますが如くば久成如来の御使、上行菩薩の垂迹、法華本門の行者、五百歳の大導師にて……〔賴基陳狀〕（全集1157P）

等に示される様に、上行菩薩の再誕と自称されます。

これは三国四師の系譜と同様に、法華經の正統を法華經の会座にて付属を受け末法に伝える者であるという、正統性を示す為の表現であります。もう一つ、後年になつて日蓮大聖人様は常不輕菩薩の承継を示されて来るのであります。

過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未來は不輕品為る可し、其の時は日蓮は即ち不輕菩薩為る可し

「寺泊御書」(全集954 P)

勸持品とは、日蓮大聖人様は特に最後の二十行の偈を示されているのでありますが、この二十行の偈は、文頭に

唯願わくは慮いたもう為からず 仏の滅度の後の恐怖悪世の中に於いて我等当に広く説くべし

「法華經開結」(63 P)

と示され、釈尊の説法でなく、衆生の側の、それも釈尊滅後、我々はこういう信心の生き方をして行きますという誓状としてこの經が示されているのであります。

そしてこの經文の中に、日蓮大聖人様が御書の中に再々引用される所の

諸の無智の人の悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶべし 同(63 P)

悪鬼其の身に入りて我を罵詈毀辱せん 我等仏を敬信して、当に忍辱の鎧を著るべし 同(65 P)

仏の方便 隨宜諸説の法を知らずして 悪口して擗ひん蹙しし 数数見擯出せられ 同(65 P)

等の經文も全て衆生の側から仏に対する誓いなのであります。

前記「寺泊御書」と同趣旨で「頭仏未來記」には、

此の人は守護の力を得て、本門の本尊妙法蓮華經の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか。例せば威音王仏の像法の時、不輕菩薩、我深敬等の二十四字を以て彼の土に広宣流布し一國の杖木等の大難を招きが如し。彼の二十四字と此の五字と其の語殊なりと雖も其の意是れ同じ。彼の像法の末と是の末法の初と全く同じ。彼の不輕菩薩は初隨喜の人、日蓮は名字の凡夫なり。(全集507 P)

と示され、まさしく凡夫の生命のまま改めずして法華經の行者として仏なり

當位即妙本有不改の成仏を立て、歴劫修行、灰身滅智の信行成仏を否定して、勸持品の内容と

我深く汝等を敬う 敢えて輕慢せず 所以は何ん

汝等皆菩薩の道を行じて 當に作仏することを得べし

の常不輕菩薩の修行の内容を合せて、末法に於ける成仏の姿として示されているのであります。前に引用した「寺泊御書」(954 P)はそのことを示してい

るのであります。

「彼の二十四字と此の五字と其の語殊なりと雖も其の意是れ同じ。」

の意味も、私は、二十四文字を意識すれば、

私は深く一切衆生を尊敬します。一切衆生を見下げ  
る様な慢心は持ちません。

その理由は、

一切衆生は、皆法華經の南無妙法蓮華經の菩薩と  
して信心修行に精進すれば、皆等しく南無妙法蓮華  
經の仏となる事が出来るからです。

となります。はじめの

私は深く一切衆生を尊敬します。……慢心は持ち  
ません。

は、法華經の方便品における、一切衆生と仏の絶対  
の平等を表現しています。そして後半の「その理由  
は」の後の条文は

寿量品の一切衆生は皆南無妙法蓮華經の仏の生命を  
平等に持ち、南無妙法蓮華經の信心修行をすること  
によつて、等しく南無妙法蓮華經の仏になることが  
出来る。

という前半の絶対の平等と後半にその平等の理念を

示しているのであります。

ここに示される仏性は、天台の本覚思想に流れる、  
一切衆生に仏性があるのだから、何をしていても、  
いつかは仏になれるのだから、何んでもありの何ん  
でもゆるされるという感覚のものではなく、南無妙  
法蓮華經の縁、信心、修行というものに触れない限  
りはその仏性は無いと同じであるという、十界互具、  
仏性なのであります。

この意味内容が日蓮大聖人様の南無妙法蓮華經の  
題目の中に入っているからこそ

「彼の二十四字と此の五字と其の語殊なりと雖も斯  
の意是れ同じ」  
と示されるのであります。

建長五年四月二十八日より二十八年の歳月が流れ  
た弘安三年十月に示された「諫曉八幡抄」には  
已に仏記の五五百歳に当たれり。天台傳教の御時は  
時いまだ來たらざりしかども、一分の機ある故に、  
少分流布せり。何に況や今は已に時いたりぬ。設ひ  
機なくして水火をなすともいかでか弘通せざらむ。  
只不輕のごとく大難に値うとも流布せんことを疑い  
なかるべきに

(全集 585 P)

と示され、折伏、修行（勸持品、常不輕品）生命に及ぶ法華經身読の生き方があつてこそ一切衆生の仏性が開示悟入されて、一切衆生成仏（広宣流布）が大地を的として成就されるのであるという。完全に折伏すべき宗旨が熱原の法難によつて示し、立てられたことを明示しているのであります。

年代は文永九年五月にもどりますが、鎌倉の女性信徒が佐渡の日蓮大聖人様に正法の教示を求め旅をして来ます。

此の女人をば影の身にそうがごとくまほり給うらん。日本第一の法華經の行者の女人なり。故に名を一つつけたてまつりて不輕菩薩の義になぞらえん。日妙聖人等云云。相州鎌倉より北国佐渡の国、其の中間一千余里に及べり。山海はるかにへだて、山は峨峨、海は濤濤、風雨時にしたがう事なし。

「日妙聖人御書」（全集121P）

つまり、法華經の行者として、女性の身であり乍、生命を亡くす危険も越えて正法の教示を求めて旅して来た。その身軽法重の姿に不輕菩薩の姿を見て日妙聖人の名前を与えた。日蓮大聖人様が末法の法華經の行者としての成仏の姿というものをこの様に見

ているということが良く分るのであります。

同様に「崇峻天皇御書」には

一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり、不輕菩薩の人を敬いしはいかなる事ぞ、教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ

（全集1174P）

と示され、もちろん「人の振舞」とは欲望にさいなまれ、流される、妙法の縁を持たない世間の人の振舞いや人格的・道徳的生き方のことを言っているのではなく、この世の中に生れた以上は、眞実の南無妙法蓮華經の法に縁して不輕菩薩の二十四字の經文が意味する所の十界互具の生命を自覺して成仏出来る生き方をしなければいけないということを人の振舞いと言われているのであります。

このことが弘安二年の熱原法難を通して無知文盲を余儀無くされる百姓の生活の中で日興上人の過去の四十九院、実相寺の縁によつてなされた折伏によつて入信し、日蓮大聖人様に直接あつたこともない、御本尊の下附もなかつたと思われる人々が、自分達の様な立場の人間でも必ず成仏することの出来ることを説き示された唯一の妙法を信じ、修行し、斬首

の恐怖、痛み、苦しみ、悲しみを越えて、南無妙法蓮華經の御題目を唱え乍貫き通し、生き抜いたのであります。

そこに、日蓮大聖人様は、竜の口の首の座での自分の信仰の思いと同じ思いを熱原の百姓が共有し得た。人法一箇の法華經の行者の師弟一箇がそこに成し遂げられたことを感応し、弘安二年の本尊を建立されたのであります。

仏だけの出世の本懐はないのであります。それ以外にも述べた様に、仏の本懐は一切衆生の成仏でありますから、一切衆生を想起させる弟子の存在がなければ、示すことが出来ないであります。

このことが「観心本尊抄送状」の中に明らかにされていきます。

仏滅後二千二百二十余年未だ此の書の心有らず、困難を顧みず五五百歳を期して之を演説す乞い願くば一見を歴來るの輩は師弟共に靈山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん、恐恐謹言。

(全集 255 P)

末法の本尊とはどのような内容のものでなければいけないかということを示された「観心本尊抄」の送

状において、「未だ此の書の心有らず」心を観る本尊の心が未だ顕われていないと教示されているのであります。しかし、この心があらわれたならば、

師弟共に靈山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん

と示され、正しく師弟一箇の成仏の相があらわれることを示しているのであります。

熱原法難の殉教を示された「上野殿御返事」(全集 1561 P)には

つゆを大海にあつらへ、ちりを大地にうづむとをもへ。法華經第三云「願はくは此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云

と、「観心本尊抄送状」と同意を示しているのであります。

此の書の心こそが、出世の本懐、宗旨、熱原法難機縁の弘安二年の本尊の心なのであります。つまり、日蓮大聖人様は生れてくる前から仏ではなく、

凡夫の生命のまま改めずして 法華經の行者として 仏なり

ということを生きた手本として示してくれた本仏な

のであります。

これを久遠元初の本仏と、従果向因して言うのであります。

## 結

建長五年四月二十八日は「宗旨」でなく法華經の行者の誕生、出発の重要な日であります。

一切衆生成仏の「法華最第一」にたどりつき、「最第一」の内容を実行し詮じ詰めて行く「宗教」の山裾野を登りだした立教開宗の日なのであります。

それでは「宗旨」はどこにあるのか「宗旨建立」された日はいつなのか具体的に答えろと質問されれば、私は、「宗旨」とは、昔しから通説とされている、戒壇本尊が建立されたという弘安二年十月十二日という風に表現され、限定され固定化されたものではないと答えます。

弘安二年に起きた、熱原法難を機縁として示された、本尊自体を宗旨というのではなく、顕わされる基になった法を宗旨というのであります。

形や年月日に限定されたものでなく、時、空を超えて、一切衆生に、共通、共有される、元々からあつ

た法なのであります。これを久遠元初の法というのであります。

釈尊在世、正法時代、像法時代は、釈尊が根本と考えられ、仏法は釈尊の創造物、所有物、占有物の様に信じられ、戦争時代の天皇現人神、朕が国家なりの様に、釈尊自体が仏法の様に拝されて来たけれども、真実の仏法はそうではなく、仏の法ではなく、仏が悟った法であり、一切衆生全ての法、一切衆生全てが当事者の法であり、釈尊個人のものでなく、一切衆生自体のものであることを示したのが、久遠元初の法なのであります。「宗旨」Ⅱ「久遠元初の法」でなければ一切衆生成仏は成立しないのであります。

「宗教」と「宗旨」、このたてわけを整理し明確にしなければ、何を信じ、何を行体とし、何んの為に信心しているのか、その要である成仏を失ってしまします。

建長五年四月二十八日を分別なく「宗旨建立」と言う者、何故そこに「宗旨」があるといえるのか、今度は私からの質問に答えて頂きたい。